

Trotz alledem!

—— フライリヒラート序説 ——

時が交われれば鳥も交わる
鳥が交われれば歌も交わる
なんと騒々しい驚鳥ども
傾向づいてぶくぶくふとり

むやみに党派の尖塔で
しびれた羽をばたつかせ
偏平足でしゃがれ声
大声たててからさわぎ

(ハインェ『アッタ・トロル』初稿⁽¹⁾)

詩人は党派の尖塔よりも

宮 野 悦 義

高い望楼の上に立つ

(フライリヒラート『スペインより』⁽²⁾)

一八四〇年代初めのドイツはまさに政治詩の季節と呼ぶにふさわしい一時期を迎えていた。「戴冠せるロマン主義者」フリードリヒ・ヴィルヘルム四世の無為無策にたいする幻滅が、広範な反政府気運の高まりを招き、いわゆる「三月前期^{フョーゲン}」の運動に繋がっていくこの時期、その先導役を勤めたのがヘルヴェークをはじめとする政治詩人たちである。政治詩の隆盛は数字の上からも容易に確認できる。たとえば一八四一年に発表されたヘルヴェークの『ある生者の詩』⁽³⁾は、発行後間もなく一〇〇〇部

が売れ、その後版を重ねて二年間に六〇〇〇部、最終的には一五六〇〇部余が売れたといわれる。このころ並外れたベスト・セラーといわれたウーランツの詩集が、一八一五年から一八三九年にかけて一二〇〇〇部を消化したのと比較すれば、この数字がいかに大きいか分るであろう。ヘルヴェークと並ぶ一方の雄、ファラーズレーベンの『非政治的詩集』⁽¹⁾という名の政治詩集についても事情は変わらない。特にその第二部は初版の発行部数からして四〇〇〇部と記録的なものであった。⁽²⁾もちろんそこには出版事情の飛躍的な発展という背景もあるのだが、と同時に政治詩のもつ特殊な効果、これに共感する支持層——広範な民衆の存在が注目されねばならないであろう。

この一般的潮流のなかで極めて特異な軌跡を描いた二人の詩人がいる。そのひとりとは、「主義主張のみで才能に欠ける」として政治詩人に対して痛烈な罵声を浴びせつつも、やがてみずから独自の政治詩の世界を展開したハイネ、いまひとりは一八四三年まで孤高の詩的世界を守りつづけながら、突如として政治の、党派の現実へ降り立った異色の詩人フライリヒラートである。生まれな

がらにして時代への反逆を運命づけられたハイネの場合とは異なり、フライリヒラートのこの突然の政治への転向は、当時のドイツ文学の世界では特筆に値する事件であった。以下小論はフライリヒラートの転換点^{ゲランデ・フンクト}、その契機となったと考えられる一つの詩を中心に、今はあまり顧みられることのないこの詩人にささやかな光をあててみたい。

フライリヒラートは一九世紀半ばのドイツでもっとも愛された詩人のひとりである。一八三八年にコッタ社から刊行された彼の処女詩集の成功は、一八四四年以降の「三月前期」^{フョーア・マルツ}を代表する詩人、「ドイツで最初のプロレタリアート詩人」といった評価の影に隠れがちだが、当時としては画期的な出来事であった。今日では一般に「三月前期」^{フョーア・マルツ}の、時代の社会現象に積極的に関与した詩人たちは、おしなべて没個性的に処理され忘却されている。文学史の主流は、市民社会というよりはむしろ農民的な郷土の風景に繋がる詩人たち、「ピーダマイアー」と総称される詩人たちの孤独な世界である。しかし、フライリヒラートを他の群小政治詩人とともに、ドイツ三月革命劇の書割の一つとして処理することはできない。彼の

初期の詩が当時のドイツ文学に与えたインパクトの強烈さを考えても、またラディカルな革命詩人に変貌した後その影響力を考えても、彼の非凡な力量はもっと注目されていいはずである。一八六七年には全ドイツ的な規模でフライリヒラート記念行事が行われた。亡命の地イギリスで苦境にある詩人を祖国に迎え入れようとして企画されたこの救援活動は、彼が当時を代表する国民的詩人として、民衆の深く敬愛するところであったことを如実に示している。

1

フェルディナント・フライリヒラートは一八一〇年デトモルト(ヴェストファーレン)に教師の息子として生まれた。不遇な家庭状況のため彼はギムナジウムを中途で断念し、商人としての道を歩むことになる。一五歳のときに彼はゾーストで伯父の営む植民地物産店に見習いとして勤め、その後二二歳のときにアムステルダムのある替商に勤務した。早くから職業をとおして外国文化に接触する機会をもったということが、フライリヒラートの生涯にとって重大な意味をもつ。ゾースト時代、彼は散

文的な日常の合間を縫うように英仏の文学作品に親しむが、いつしか詩の翻訳、そして詩作にも手を染めて、早くも『モースター』⁽⁷⁾のような異色の作品を書いている。続くアムステルダム滞在は一つの転機となった。海、船、黒い肌、異国の地から運ばれて来る商品等々が、少年の頃から豊かな想像力をいやが上にも刺激して、フライリヒラート独特の詩的世界が作られていく。こうして初期のフライリヒラートの代名詞ともいふべき「沙漠とライオンの詩人」の時代が始まるのである。

沙漠の果てに麒麟はよろめき かすかに喉をならす
埃にまみれ泡を吹き息絶えて 今や乗手の飼食となる
マダガスカルの彼方はるか東方に 曙光がさしそめ
かくて百獣の王はおのれの領土の果てまで夜毎疾駆す⁽⁸⁾
る

一八三三年、この『ライオン騎行』をはじめとする数篇の詩が、シャミソー、グスタフ・シュヴァープの主宰する『ドイツ年刊詩集』⁽⁹⁾に、次いで『海に寄す』⁽¹⁰⁾ほか数篇がコッタ社の『モルゲンブラット』紙に掲載されるや、

フライリヒラートの名は一躍詩壇の惑星として輝くことになる。「この詩人がうたい始めてから、われわれはみな雀にすぎなくなった」と大御所シャミソーは評した。

たしかに豊かな色彩と力感、そしてある種の狂燥を秘めたフライリヒラートの詩の世界は、後期ロマン派の粹を超えてはばたくスケールの大きさ、斬新さを示していた。個々の詩の基調をなすものはロマンティズムであったが、そこには新しい世界が、そして後にベッティーナがいみじくも指摘したように、「蒸気船の外輪の性質」、つまり単純な小舟の航行ではない。「共通の欲求と力、時代の動き」が感じられたのである。すでに示唆したように、彼のこの華々しいデビューの背景として、彼が少年期から親しんできた外国文学の影響が考慮されねばならない。彼の詩作の模範となったのはゲーテやシラーではなく、また後期ロマン派の詩人たちでもなく、実に英仏の詩や小説であった。特に彼の初期の、世間の注目を集めた「沙漠とライオン」の詩のかずかずは、ヴィクトル・ユゴーの影響を無視しては語れない。彼は早くからユゴーの作品に親しみ、詩の翻訳をも手がけていた。⁽¹⁴⁾そして、彼がアムステルダムで肌で感じた異国の雰囲気は、この

ユゴーの詩の世界をますます彼自身のうちに取り込む結果となったのである。

その後のフライリヒラートは、市民的職業と詩的情熱の葛藤に苛まれながらも努力を重ねて、一八三八年、出版界の名門コッタ社の協力のもと処女詩集の刊行に漕ぎつける。そこには先に述べた『ライオン騎行』を中心とする異国情緒あふれる作品群をはじめとして、若きフライリヒラートの気負いをも感じさせるさまざまな試みが、目もあやな色彩、変化に富むリズムで展開される。さらにはミュッセ、スコット、モアなどの英仏の詩の翻訳も添えられて、さながら万華鏡を思わせる大部な『詩集』一巻であった。すでに高い名声を得ていた彼のこの処女詩集は圧倒的な成功を収める。この詩集にたいしてはシャミソーのみならず、ブレンターノ、ドロステ・ヒュルスホフ、インマーマン、それに毒舌をもつてなるハイネまでもが、ゲーテ以後もっとも注目すべき才能と讃辞を惜しまなかったのである。⁽¹⁵⁾

この成功は遂に彼を市民的職業から解放し、詩作と翻訳に専念させた。そして名声と、やがて結婚による家庭生活の幸にも恵まれて、いつしか彼の詩には変化が生ず

る。「沙漠とライオン」の狂燥は影をひそめ、美しい郷土の自然や伝説の世界が徐々に彼の詩の主題となる。⁽¹⁵⁾ところが、彼の思索が内面に向う兆を示し始めたこの頃、鬱勃と滾り始めた当時の社会情勢を背景に、予期せざる展開が彼を待っていた。一八四一年、フライリヒラートは重大な転機を迎える。

2

フライリヒラートの急激な方向転換の理由と経過を明らかにする作業は極めて困難であるといわざるをえない。それは徐々に蓄積された地殻の歪みが突如として地表を揺がすにも似ている。歪みの因の一つは、処女詩集の成功に伴う外部からの圧力であろう。先に後期ロマン派に属する詩人たちの絶賛について触れたが、他方、この新星にまったく別の角度から熱い視線を注ぐ一派が存在した。彼らもまたフライリヒラートの渾沌とした詩の世界に新たな息吹きを、ベッティーナのいう「時代の動き」を感じとっていた。そしてひそかにこの沙漠に眠る獅子の覚醒を期待したのである。その代表的な人物こそヘルヴェークであった。

ヘルヴェークは詩集『ある生者の詩』のなかに『フライリヒラート』と題する詩一篇を掲げた。そしてまずは「千夜一夜」的な世界を捨てよとフライリヒラートに呼びかける。

・・・・・・・・・・

きみのオリエントはまたしてもスミレの香り
わたしはいたづらに異郷の地に遊ぶことなく
この地にとどまり誠実に生きたいと願う⁽¹⁷⁾

フライリヒラートはヘルヴェークのこの詩集にいち早く目を通していた。一八四一年九月の友人に宛てた手紙には明らかにこれに関する反応が見られる。

「ところでヘルヴェークはチューリヒで「生きて」います。有名な人物です。しかし政治詩というものは、計算づくでやっているかぎりものの役にはたちません。また愛国的・政治的な詩とは別ものです。詩はまさに永遠なるもの、不変なるものを志向すべきであり、あわれで惨めな人間生活や国家の呪わしい汚辱や屑とかかわらなければならぬ義理はありません。もっとも私の駱駝や黒人として、もちろん残念ながら読者を天上の高みに導く永

遠にして不変なるものとはまったく無縁ですが。でも、神様がもう少し自由な空気を下さり、今の苦勞をいささか柔げて下さるなら、もっと立派な仕事ができると思うのです……」⁽¹⁸⁾ フライリヒラーはヘルヴェークの呼びかけを一笑に付したのではなかった。激しい反発の姿勢を示しながらも、処女詩集以降のある種の壁に突き当たったようなもどかしさと相まって、内心の動揺を隠しおおせてはいない。次いで三ヶ月後、彼もまた詩の形を借りてヘルヴェークに応酬する。しかし、フライリヒラーの誠実ではあるが冷静さを欠く本性そのままに、いささか意識過剰な、作意的な対応であったといわざるをえない。彼は『スペインから』と題するこの作品で、スペインの内乱という当時の彼としては珍しく時代史的な主題を扱った。そして、この内乱の過程で疑惑の多い人物ディエゴ・レオンを英雄と讃える一方、本論の冒頭に掲げたあの二行を含む一節を挿入したのである。しかし、詩人の無党派性を標榜するこの巧みな二行は、果たしてフライリヒラーの信念の吐露であったのか。自らの内面で未だ形をなすことなく沸騰するものに、意識的に非政治性の刻印を与えたのではなかったろうか。ヘルヴェ

ークはその点を見抜いていた。そして単刀直入に『党派』⁽¹⁹⁾と題する詩でフライリヒラーに決断を迫った。

党よ、党よ、だれがそれを必要としないであろうか
すべての勝利の母であった党を！

どうして詩人がこの言葉を駆逐しえよう

あらゆる崇高を生んだこの言葉を！

さあ男らしく明らかにしよう、敵か味方か、

誓言しよう、奴隸か自由か

神々ですらオリュムポスを降って

党派の尖塔でたたかったのだ！

この激しい叱咤に当時の反体制派の人々は歓声をあげた。『スペインから』は彼らに対する挑戦と受けとめられていたのである。一方、保守派と目される彼の周囲の人びとは「高い望楼」を支持して、詩と政治の問題が騒然たる時の話題となる。その渦の中で、フライリヒラーは次第に動揺の色を濃くしていく。彼は友人にあてた手紙のなかで、「大胆なあの表現（「高い望楼」云々をさす——筆者注）を後悔してはいない」としながらも、次の

ように書いています。

「ところでマッツよ、どうか私に教えてくれ。私の考えは時代遅れなのか、いやそれどころか後ろ向きなんだろうか。私はこの時代の風を感じているし理解もしている。時代の車輪を押し止めるのは許されぬということも分っているし、その車輪が前に進むのは自明の理だ。しかし時として狂信的な、あるいは非情なこの革新派の試みに私はなじめない。詩とはまさにヘルヴェーク流に喇叭を吹くことなり、といった論法には納得できない。」⁽²⁰⁾

ここではもう「永遠にして不変なるものを志向する」立場からの批判ではない。批判の重心は「ヘルヴェーク流の喇叭の吹き方」に移行している。ひしひしと迫る時代の潮流を感じながら、なおも彼は時代と詩の本質との接点を求めて模索を続ける。その意味で、やがて移り住んだ美しいザンクト・ゴアールでの作品、『ライン河畔の小さな町』⁽²¹⁾は象徴的な詩である。

お前の王国は終わった、隠さずにいおう、
この世を支配しているのは別の精神だ、
みな感じている、新たな精神が

生活に脈打ち、詩となって燃え上るのを

それは努力したたかう——かってないことだ

私はそれに仕え、その勝利を願っている

だが、だからといって追放されたお前をどうして敵に
まわせよう

「おまえは追放された——しかしまだ依然として女王なのだ」と「ロマン的精神」に呼びかけるこの切々たる「訣別」のうたに、当時のフライリヒラートの心境がうかがえる。しかし、彼はこのとき、なんの抵抗もなくプロイセン国王の年金三百ターレルを受け取っていた。

3

美しいザンクト・ゴアールの町はほどなくフライリヒラートの決定的な転換の目撃者となる。

ヘルヴェークとの関係はフライリヒラートの年金受領を機にますますこじれて、危険な方向にエスカレートして行く。説得工作に失敗したヘルヴェークは硬化し、
『年金生活者のデュエット』⁽²²⁾という辛辣な詩を発表した。
一方フライリヒラートは、ヘルヴェークのフリードリ

ヒ・ヴィルヘルム四世にあてた公開状、それに続く国王謁見、そしてその挙句の果ての国外追放という一連の事件をとりあげ、『手紙』⁽²⁴⁾という詩を発表してヘルヴェークの失敗を痛烈に批判したのである。フライリヒラートのこの詩は大きな反響を呼んだ。国外追放という不幸な事件に更に追打ちをかける形となったために、マルクスをはじめとする反体制陣営の強い反撥を招いたのである。ヘルヴェークの軽率な行動を批判したのはなにもフライリヒラート一人ではなかったが、そのタイミングの問題がある。ここでも彼はいささか不用意であったといわざるをえない。しかし、もっと重要なことは、この詩を発表することでフライリヒラートが時代のもっともアクチュアルな問題に、積極的に介入したことであろう。ヘルヴェークの行動を批判することで、彼もまた政治詩の領域に足を踏み入れた。そしてフライリヒラートの思惑の如何とは無関係に、反体制派の自由主義運動に棹さす結果となったのである。

プロイセンを中心とする政府当局は、当然のことながら早くから政治詩の煽動的効果を危険視していた。そして網の目のように張りめぐらされた当局側の監視組織は、

多くの政治詩人たちとその周辺の人物の動向を見事に捉え、克明に記録し報告していたのである。⁽²⁵⁾これまで扱ってきたヘルヴェークのフライリヒラートに対する働きかけも、かなり早い段階から監視の対象となっている。当局側は明らかにこの「大物」の動向に注目していた。フライリヒラートの周辺、おそらくは親しい友人のなかに、情報提供者のいたことも確認できる。彼らはひとしくフライリヒラートがヘルヴェークの軍門に降るのを危惧していた。したがって彼らは、「詩人は党派の尖塔よりも高い望楼に立つ」という宣言に安堵し、この結論を利用して政治詩人に対する攻勢を強めるのである。やがて検閲が強化され、政治詩の主な活動舞台である新聞への弾圧、発禁処分が相次ぐ。もちろんフライリヒラートが責任を負う筋合ではなかった。彼自身こうした弾圧を憂慮していたのである。しかし、たとえば『ライプツィヒ一般新聞』の発禁処分に際して、彼はヘルヴェークの国王あて公開状がその原因であるとして、非難の鋒先をもっぱらヘルヴェークに向けた。⁽²⁶⁾それがヘルヴェーク論難の詩『手紙』の動機であった。フライリヒラートにいわせれば、「自由のために」⁽²⁷⁾ヘルヴェークの所業を攻撃した

のである。それはもはや「高い望楼に立つ」詩人の作品ではなかった。彼は意に反して一步踏み出していたのである。そして、すでに述べたように、この詩は猛烈な非難を浴びた。ところがその急先鋒であった『ライン新聞』にもやがて発行停止の処分が迫る。事態は深刻であった。今やフライリヒャートは、彼自身の、また彼の周囲のこの逼迫した状況に、なんらかの對抗措置をとる必要を感じ、二つの動きを示す。一つは『ライン新聞』の発行停止処分に反対する請願を支持することであり、いま一つは自身の政治的立場——急進主義には反対だが主義主張において、言葉や行動において「決して反動に組することのない」⁽³¹⁾独自の立場——を明らかにすることであった。かくてフライリヒャートは、「一連の詩によって自分の世界観を世に問おう」と決意する⁽³²⁾。

4

反動に組することなく、しかも急進主義者とは一線を画したい、とするフライリヒャートのこれまでの基本理念が、彼の予告どおりやがて数点の詩に形象化される。『レンゼの玉座』⁽³³⁾、『自由—正義—』⁽³⁴⁾、スコットランドの詩

人バーンズの訳詩『それでもなお!』⁽³⁵⁾、『人類という樹のもとで』⁽³⁶⁾等々、一八四三年の後半に書かれたほとんどの詩は、権威に屈することのない人間、自由、正義といった基本的——別の観点からすれば抽象的——な理念を主題としている。その意味では彼の当初の意図にそっており、党派の詩人を拒みとおしたフライリヒャートの真意をうかがわせるに十分な作品となっていた。ところが、不幸な偶然が重なった⁽³⁷⁾こともあって、彼としては予想もなかった検閲とのたたかいが始まる。

先ず最初に『自由!正義!』の『ケルン新聞』掲載が検閲の大幅な削除のために不可能となった。「不穏な空気を醸成する傾向」が見受けられるというのである。フライリヒャートは即刻ベルリンの高等検閲裁判所に異議申し立てを行うが、続いてバーンズの訳詩がやはり『ケルン新聞』から送り返されてくる。こうして二通の異議申し立てがベルリンに送られるが、約一ヶ月後の最終判断は削除を行った担当検閲官の措置を是認するものであった。判決文は次のようなものである。

「この二つの詩がよって立つ根本思想は、より明確かつ純粹に把握され表現される場合には完全に真実であり、

詩の形式で表現され讃美されることもありうる。しかしながら当該の詩にあっては歪曲が行われており、既存の社会的、政治的秩序に対する挑戦的な傾向——第一の詩においては誤った自由の理念、第二の詩においては異なる階層の敵対——が、刺激的な言葉で表現されている。

よってこれらの詩の検閲規則第四条違反は明白であることが判明した。⁽³⁸⁾

検察側の告訴状は更に強硬で、社会秩序の転覆を企む党派を称揚し、この傾向の信奉者を殉教者扱いするものだ、と非難した。フライリヒャートはこの結論に激怒したが、その幾分かは自らの事態認識の甘さに対する怒りでもあったろう。特に「人間の品位と人間の権利のための美しい、すばらしい詩」、バーンズの詩の翻訳が抹殺されたことは大きな打撃であった。「基本的な人間の権利」を詩的に表現すること自体、言論、出版の自由という具体的な闘争の目標に直結し、フライリヒャートの拒否してきた党派的な運動に繋がる、少くとも当局側はそうした観点でのみ判断するということが、今や彼には明白となった。

「ここで詳しく申し上げるのは手紙の域を越えること

になるかもしれませんが、先日お目にかかって以来、私は研究、省察、それに日々われわれの眼前で起こっている事実によって、ますます左翼へと駆り立てられています。革命は望みませんが、それでも改革が必要だと思えますし、それに最近の議会での決定やその他もろもろによって、私には明らかになってきました。つまり、詩人というものは、たとえばあの善良なガイベルのように、保守的な無邪気さで結局は野蠻きわまりない絶対主義の片棒を担いでしまうのです。私は手を切らねばなりません。私は自分の確信にしたがって、私の誠実さが求めるいつわりのない、明確な態度をとるつもりです。私は桶を床にたたき割ります。たとえそこからなにが出てこようとも。⁽⁴⁰⁾

この一八四四年一月から二月にかけて、彼の詩は大きく左旋回する。「民衆のために民衆とともに自由に時代のなかに立ちあがろう」と転機をうたった『おはよう』⁽⁴¹⁾、⁽⁴²⁾「ある検閲官の末路」という副題をもつ『きちがい病院にて』、同じく検閲制度を攻撃した『いつの日か?』⁽⁴³⁾、シュレージェンの織工の暴動を予告するような『シュレージェンの山間より』⁽⁴⁴⁾等、すべてがこの短い期間の作品

であり、フライリヒラートが「高い望楼」から降りたことを示す詩である。誠実なフライリヒラートは、ここに至る経過の一切を世に問うべく、ヘルヴェークを批判した『スペインから』、『手紙』をも含めて、一つの詩集にまとめた。一八四四年二月十一日、その詩集の題名は『信念の告白』⁽⁴⁵⁾と決められる。彼の言葉どおり、それは「彼の生涯にとって決定的な」⁽⁴⁶⁾ものとなった。もちろん、彼の処女詩集を刊行した出版界の名門コッタ社は、この第二詩集『信念の告白』の刊行を拒否した。⁽⁴⁷⁾

5

最後に、フライリヒラートの政治への転換の契機となったバーンズの作品『それでもなお!』に関連して、いくつかの点を指摘しておきたい。詩集『信念の告白』のなかには、バーンズの詩を含めて、四つの英語からの翻訳がある。アメリカの詩人ブライアントの『風』⁽⁴⁸⁾、イギリスの詩人キャンベルの『イギリスからドイツへ』⁽⁴⁹⁾、エリオットの『ライブリンの樹』⁽⁵⁰⁾がそれで、いずれも人間の最高の宝としての自由を讃え、これを制約するものへの憤りを表現している。処女詩集の場合と異なって、フ

ランスからの訳詩はない。そのほかにもドイツ人の無力をシェークスピアの主人公になぞらえた『ハムレット』⁽⁵¹⁾やスコットの詩に題材をえたとされる『スコットランド人のならい』⁽⁵²⁾があり、詩集第二部のモットーにはヒマンズの『森の聖堂』⁽⁵³⁾の一節が掲げられているから、この決定的な時点で果たした英詩の役割の重要性については十分に研究の対象となりうる。翻訳としてばかりではない、フライリヒラート自身の創作の上にも、それらは少なからぬ影響を及ぼしていると考えられるからである。「沙漠とライオン」時代の彼にはフランスの詩、とくにユゴーの影響が強烈だった。しかし第二詩集以後、圧倒的に英詩に傾斜して行く。そして、この一八四四年の時点では翻訳が彼の思想に適確な表現を与え創作をリードした、ところが一八四六年の詩集『サ・イラ』⁽⁵⁴⁾以降、彼の創作活動が政治的な意味で高まりを見せはじめると、翻訳詩の方は激しい血の騒ぎを鎮静するかのような暖かく優しい作品が選ばれる。⁽⁵⁵⁾この不思議なバランスに、フライリヒラートという詩人の本質を明らかにする鍵があるように思われてならない。

ここでは再びバーンズの詩に戻ろう。フライリヒラー

トは早くからバーンズの詩に愛着を抱き、一八三八年の処女詩集には十三篇の歌謡の翻訳が含まれている。彼は哲學的な思想ではなく人間の感情を直截にうたうバーンズに自らと共通する資質を感じとり、また素朴な感情が素朴な言葉で表現されていることにも魅せられた。詩の主題についても、彼はスコットランドの土地と民衆を愛したバーンズに学ぶところ多く、それを創作にも反映させて、彼の故郷ヴェストファーレンの美しい風土をしばしば登場させている。数は少いが『雑草をつんで』⁵⁶に代表される恋のうたも、明らかにバーンズ的なものを感じさせる。彼の手紙には幾度となくバーンズの名が登場するが、そのなかでは特に、一八五四年にバーンズの生家を訪れた際の感動的な手紙が印象深い。彼はなお存命中の詩人の実妹に会い、その黒い瞳に亡きバーンズの相貌を思い浮かべて、しばし感激にふるえたのである。

「老女はなおいいろいろとロバートのことを話してくれた——兄が死んだとき彼女は二四歳であった。バーンズはドイツでもよく知られ愛されていることを伝えると、彼女は嬉しそうな表情を浮かべた。別れに際して彼女は心をこめて私の手をとった——白状するが私は愚かにも

そのとき——いや訪問中ずっとそうだったのだが——すっかり感動してしまった。そのあとバーンズがよくうたったドーン川にそって彼の跡をたどり、彼の生涯に思いをはせていると、私は必要以上に涙もろくなっていた。でも、詩人の心に共感できるのはやはり詩人においてほかにないのだから。」⁵⁷

しかしフライリヒラーの生涯に決定的な影響を及ぼしたバーンズの詩は、やはりあの『それでもなお!』であろう。スコットランドの方言で書かれた原詩⁵⁸の味を、フライリヒラーの訳詩が果たして十分に生かしているかどうか、筆者には十分には把握しきれないが、「それでもなお! (Trotz alledem)」という力強いフレーン部分は実に見事な効果を發揮していて、彼の翻訳におけるすぐれた力量を感じさせるものとなっている。このリフレーンを巧みに配しつつ、権威に屈することのない素朴で誠実な民衆の姿を理想と讃えるこの詩は、翻訳ながら詩集『信念の告白』中の白眉といえるであろう。

ところでこのリフレーンは四年後のフライリヒラーの作品に再度登場する。同じ題名をもち、正直に「替え歌で」と書かれたこの詩は、一八四八年三月の革命の挫

折を悼む痛哭のうたであり、同時にまた「いつまで負けていられよう、世界はわれわれのものだ」と、苦境のなかから不死鳥のように力強く甦えることを民衆に訴えた激励のうたでもあった。「それでもなお!」、この二語のもつしたかな響きのなかに、『信念の告白』以後亡命を余儀なくされ、各地を転々とせざるをえなかったフリリヒラートの、その苦難の生涯が象徴的に語られている。この二語はまた時代を越えて、さまざまな局限状況にある人びとを力づけてきた。死の前日のリーブクネヒト、獄中のローザ・ルクセンブルクがこれを引用した。そしてまた筆者は先年シュトゥットガルトで、ピーマンがこの歌をギター片手に歌うのを聞いた。

- (1) H. Heine: *Atta Troll* (1841) の終章から。なおハインネは、ヘルヴェークの国外追放という運命に同情して、最終稿では引用した部分の三行目以下を大幅に変更し、ヘルヴェークへの個人攻撃の印象を薄める措置をとった。後述するフリリヒラートの『手紙』との違いに注目したい。
- (2) F. Freiligrath: „Aus Spanien“ (1841)
- (3) G. Herweg: *Gedichte eines Lebendigen* (1841)
- (4) A. H. Hoffmann von Fallersleben: *Unpolitische Lieder* (1841)

- (5) Hans-Peter Reisner: *Literatur unter den Zensur. Die politische Lyrik des Vormärz*. Stuttgart 1979, S. 7~8 の記述による。

- (6) この行事については、Reiner Noltenius: *Dichterfeiern in Deutschland*. München 1984. に詳細な報告がある。国外をも含めて二五〇以上の集会がもたれており、主催団体によってその性格、内容は必ずしも一様ではないが、市民、労働者層を含む広範な支持層を証明している。

- (7) „Moostee“ (1826) フォクスランド産の苔から作られた茶にまつわる幻想的な詩である。

- (8) „Löwentritt“ (1833)

- (9) *Deutsche Musenalmanach* 1833

- (10) „An das Meer“ (1833)

- (11) *Morgenblatt* 1835, Nr. 57

- (12) *Freiligraths Werke in einem Band*. Berlin u. Weimar 1967 の解説による。

- (13) C. Brentano an Freiligrath 1839. 9. 3 (In: W. Buchner: *Ferdinand Freiligrath. Ein Dichtersleben in Briefen*. 2 Bde. Lahr 1888. Bd. 1, S. 362)

- (14) 一八三六年にはエカールの独訳全集のうちの一部を担当したと見える。彼になかむの „Orientales“ (1827) と誤謬せられたと考えられる。Kurt Richter: *Ferdinand Freiligrath als Übersetzer*. Berlin 1899. Neuauflage 1976 Hildesheim 参照。

- (51) Vorwort von J. Schering zu F. Freiligraths Werke. Leipzig 1909, Bd. 1, S. CXIX
- (51) いそゝの語に終ひ『我のゑん』よりて装綴にせしむるなり。(Zwischen den Garben Eine Nachlese 1849).
- (51) „Freiligrath“ (1841) Herweghs Werke in drei Teilen. Berlin-Leipzig-Wien-Stuttgart, 1909, I. Teil S. 80
- (51) An Levin Schücking 1841. 9 月号 哲蘭に Karl Buchner の翻譯にあり。
- (51) „Die Partei. An Ferdinand Freiligrath.“ (1841) Herweghs Werke I. Teil, S. 121
- (51) An C. Matzerath, 1842, 3. 1
- (51) „Ein Flecken am Rhein“ (1842)
- (51) 『報漢』に載せしむるエッセイは手紙を送つて切々とフライリッヒに對意を語つてあり。
- (51) „Duett der Pensionierten“ (1843) フライリッヒにラートマン (Emanuel Geibel) の二人の年金受領詩人を槍にあらわしてあり。
- (51) „Ein Brief“ (1843)
- (51) くやせしめ『語訳』よりて語をあり。
- (51) Hans Adler (Hrsg.): Literarische Geheimberichte. 2 Bde. Köln 1977 參照。
- (51) Leipziger Allgemeine Zeitung
- (51) An Karl Buchner 1843. 1. 14 月号 H. Adler: Literarische Geheimberichte Bd. 1, S. 196—7
- (51) H. Adler 翻譯 S. 201
- (51) An H. F. G. Ebner 1843. 2. 20
- (51) An K. Buchner 1843. 3. 7
- (51) H. Adler 翻譯 S. 201
- (51) „Der Königsstuhl bei Rhense“ (1843)
- (51) „Die Freiheit! das Recht!“ (1843)
- (51) „Trotz alledem! nach Robert Burns“ (1843)
- (51) „Am Baum der Menschheit drängt sich Blüth“ an Blüth“ (1843)
- (51) 『ハンヤの新聞』の第六節に彼が中華の王ヤン・ン・ルに對し呼ぶかけあり。
- (51) 哀愴なウエンツェルヤ、われわれはもうお前を懐しんだりはしなべし
- (51) 王座にふんぞりかえるなんて別に榮しといはれていなるこのウエンツェルという名が『ケルン新聞』担当検閱官と同姓だつたのである。
- (51) H. H. Honben: Verbotene Literatur. Von der klassischen Zeit bis zur Gegenwart. 2 Bde, Dessau 1925 参照
- (51) An Karl Buchner 1844, 1, 3
- (51) An Levin Schücking 1844. 2. 3
- (51) „Guten Morgen“ (1844)
- (51) „Im Irrenhause“ (1844)

- (43) „Wann?“ (1844)
(44) „Aus dem schlesischen Gebirge“ (1844) シェラー
マンの織工の暴動はこの詩の五ヶ月後に起つてゐる。同
じテーマでハイネが時事詩の秀作を残してゐるが、フライ
リヒャルトのバラード風のこの作品にもすてがたい味があ
る。
(45) Ein Glaubensbekenntnis 1844
(46) An Karl Buchner 1844. 2. 11
(47) フレーシンの書店 Viktor von Zaubern が同年八月に刊
行した。二〇ギークン以上となるため予備検閲を免れるこ
とができただが、フライリヒャルトは危険を感じて発行後
まもなくペンキで口を封じた。
(48) „Die Winde. Nach dem Amerikaner William Curten
Bryant.“ (1843)
(49) „England an Deutschland. Nach Thomas Campbell.“
(1844)
(50) „Der Baum auf Rivehn. Nach Ebenzer Elliot, dem
Kornesetzdichter.“ (1844)
(51) „Hamlet“ (1844)
(52) „Ihr kennt die Sitte wohl der Schotten“
(53) Felicia Hemans „Das Waldheutrum“ (1844)
(54) Ca ira! (1846) 六篇の鮮烈な政治詩が含まれる。『ト
から上く』『水の宮殿』等、詩の世界に初めてプロレタリ
アートを登場させたことが注目される。

- (55) 『サ・イラー』と同じ一八四六年、彼は『近代英詩集』
を刊行する。このなかには政治的、社会的な作品はほとん
ど含まれてゐない。
(56) „Mit Unkraut“ (1839) のちに彼の妻となる女性イー
ダ・メロムに捧げられた抒情的な佳品。
(57) An Karl Buchner 1854. 7. 22
(58) „For A' That and A' That“ (1794) なお参考のため
第一節の原文、フレリヒ・モートの訳文と、大意とを次に
紹介する。

Is there, for honest poverty,

That hangs his head, and a' that?

The coward slave, we pass him by,

We dear be poor for a' that!

For a' that, and a' that,

Our toils obscure, and a' that;

The rank is but the guinea's stamp,

The man's the gowd for a' that.

Ob Armut euer Los sei,

Hebt hoch die Stirn, trotz alledem!

Gelt kühn den feigen Knecht vorbei;

Wagt's, arm zu sein trotz alledem!

Trotz alledem und alledem,

Trotz niedern Plack und alledem,

Der Rang ist das Gepräge nur,
Der Mann das Gold trotz alledem!

(たとえ貧乏が定めでも)

頭を上げよ、それでもなお!

卑屈な奴隷は放っておけ

あえて貧乏であれ、それでもなお!

それでもそれでもなお

卑しい仕事にもそれでも屈するな

身分なんぞは鍍金にすぎぬ

人間こそが地金なんだ、それでもなお!

(59) „Trotz alledem! Variet!“ (1848『現代政治社会詩集

(Neuere politische und soziale Gedichte, 1849, 1951) に
収録されている。

(9) Bernt Engelmann: Trotz alledem. Deutsche Radikale
1777~1977, München 1977 に448。

(菊池先生には昭和二六年の小平の英語授業以来いろいろと
御指導いただいた。一年のときのテキスト、ゴールズワ
ーの『林檎の木』は今もなお懐しく思い出される。お礼
の心をこめて「フライリヒラートと英詩」という——大そ
れた——テーマを予定していたのだが、力およばずその一
端を紹介するだけの中途半端なものになった。深くお詫び
したい。)

(一橋大学教授)